



原発震災2周年

福島からの訴え

三月十一日は大震災と原発過酷事故から二年。三月一杯、全国各地で反・脱原発を訴える様々な取り組みが行われた。港合同は大阪の「さよなら原発 三・一〇関西二万人行動」に参加。雨の中、中之島一帯に約一万五千人が集まり前後して近畿各地で催しがあった。東京では三月九日明治公園に一万五千人、十日には日比谷野音から国会に四万人が集まった。被災地各地でも様々な取り組み。「三・二三原発のない福島を！県民大集会」には七千が参加。全国で行動に立ち上がった人々の数はのべ十数万人だろうか？ 真実を隠し、フクシマを忘却させ、新たな安全神話を振りまいて原発再稼働・新設・輸出へと急カーブを切る安倍政権。しかし運動は衰退していない。全ての原発廃炉までフクシマと向き合い、被曝労働者と共に、粘り強く闘っていこう。大阪の集会上に福島から駆けつけてくれた武藤類子さん(福島原発告訴団団長)の心打たれる訴えを抜粋してご紹介します。

福島は例年より寒さが厳しかった。しかし雪解けと共に、雪によって遮蔽されていた放射能が、春先の強い風で舞う季節、いち早く顔を出すふきのとうを喜んで食べていた事故前がなつかしく、どこか悲しい春であります。爆発した四つの原発からは、今も毎日二億四千万ベクレルの放射能が放出されています。海に出た量は誰にも分からない。福島原発・専用港で捕獲されたアイナメから五一

万ベクレルのセシウムが検出されました。原子炉をひやし続ける為の水は、濾過装置を経て、大きなタンクに貯められています。したが、あと二年で満杯に。東電は、その水を希釈して海に流すと考えています。再び大きな地震で崩れたら、北半球の大惨事になるかもしれないという四号機の燃料プール。十一月、ようやく始まる取り出し作業は地上五〇メートル以上で行われます。安全性は確保さ

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！